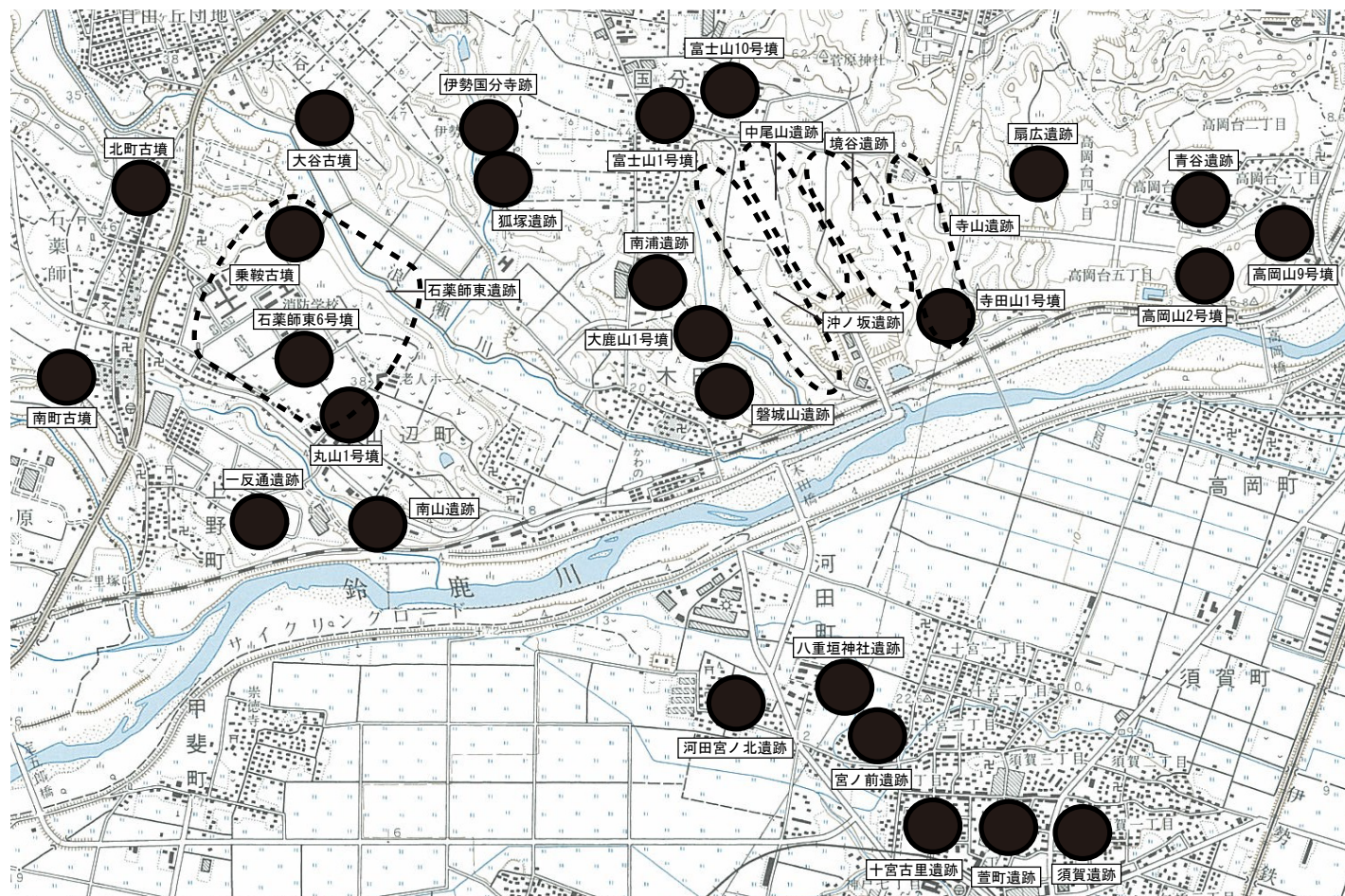


i. はじめに

宮ノ前遺跡は鈴鹿川右岸の標高10m前後の低地部に位置する。鈴鹿川の下流域には広大な沖積地が広がり、鈴鹿川ないしはその支流が幾筋も流れていた景観が想定される。流路が幾筋も時期毎に大きく流れを代えていたと考えられるが、その都度、点在する微高地上に居住地が営まれていたと理解される。鈴鹿川の形成した沖積地は、河曲地区周辺では右岸に大きく広がっており、そこには西から河田宮ノ北遺跡や八重垣神社遺跡、宮ノ前遺跡が立地する。その東側は、神戸地区の低位段丘が北へせり出しており、その微高地上に十宮古里遺跡、萱町遺跡、須賀遺跡が位置する。一方、鈴鹿川の左岸には、中位段丘及び高岡丘陵が東へ連なり、北側の丘陵上には鈴鹿川に向かってつき出す舌状の台地上のほぼ全てが遺跡の範囲として認識できる。いくつかの代表を列挙すると、一反通遺跡、石薬師東遺跡、南山遺跡、狐塚遺跡、磐城山遺跡、沖ノ坂遺跡、中尾山遺跡、境谷遺跡、寺山遺跡、扇広遺跡、青谷遺跡等が挙げられる。

宮ノ前遺跡は過去3回の調査から古墳時代から中世にかけての遺跡であることが分かっており、第1次調査では下層から弥生時代末から古墳時代前期の包含層が確認された。古墳についてみると、遺跡周囲では萱町遺跡で小規模な円墳等が確認されているが、比較的規模の大きなものは左岸台地上に集中している。左岸の代表的な古墳時代前期の前方後円墳としては、寺田山1号墳が挙げられる。また、宮ノ前遺跡第1次調査の出土遺物の中には、袋状鉄斧や須恵器の鈴付高杯、馬の下顎骨等の特殊な遺物が見られ、八重垣神社遺跡からは韓式系土器も出土している。これらのことから、朝鮮半島南部と関係を保ち続けている渡来系の人々が含まれていたと考えられている。



周辺遺跡略図(参照;国土地理院 鈴鹿[北東]1/25000)

ii . 検出遺構

主な遺構として溝 4 条, 掘立柱建物 1 棟 (南辺一部分), ピット 1 基が確認された。

なお, 遺構表記は, SR ; 流路, SB ; 建物, P ; 柱穴, ピットの遺構略号に調査回数と遺構を確認した順に数字を与えている。

1. 溝

確認された溝 4 条はいずれも北西から南東に向う流路と考えられる。SR0402, SR0403 は河道であると思われるが, SR0404, SR0409 は自然なものであるか, 人工のものであるかは不明である。

SR0402 南壁沿いで検出した。西壁から南壁にかけて左岸がのびていることから, 第 2 次調査で検出された SR0202 の続きである自然流路と判断した。検出面からの深さは, 最大で 0.45m 程度あり, 埋土は上から黄褐色砂混シルト層, 暗黄灰砂混シルト層, 暗黄灰細砂層の順になっている。

出土遺物には, 土師器の脚付壺, 台付甕, 高杯や須恵器の甕, 杯蓋, 杯身, 高杯, 大型獣の骨がある。7 世紀代の遺物が多いことから, この流路は飛鳥から奈良時代のものとする。弥生後期から古墳初期にかけての土師器は混入とみられる。

SR0403 SR0402 に流れ込むかたちで合流する支流と考える。この溝は浅く, また, 西側に向かうほど浅くなっていくことから, もともと SR0402 のワンド, または水衝部であったところに, 洪水により溢れた水が流れ込みできた副流路であるとする。埋土は, 黄褐色砂混シルト層のみ確認できた。

出土遺物には, 弥生土器, 古墳初期の土師器甕, 高杯, 大型獣の骨のほか, 古墳時代後期の土師器や須恵器の破片がある。それらの中で土師器甕, 高杯, 大型獣の骨は SR0402 と合流する溝部分の深いところで出土しており, 下層遺構に伴うものの可能性が高い。

SR0404 調査区北側で検出した。SR0409 と重複するが, SR0409 の方が先行するため SR0409 の埋没後に SR0404 ができたと考えられる。しかし, SR0409 の出土遺物から年代差は少ないと思われる。

出土遺物には, 土師器や須恵器の杯 B などがある。出土数は少ないが, 土師器や須恵器は 7 世紀代のものであったことから SR0402 と同時期に流路として機能していたとする。

SR0409 調査区北側で検出した流路である。SR0404 と重複するが, SR0409 の方が先行する。

出土遺物には, 土師器甕の口縁部や須恵器の杯 B, はそう口縁部などがある。出土遺物の土師器や須恵器は 6 世紀末から 7 世紀末にかけてのものであったことから, SR0402 と同時期の流路であったか, やや先行していたとする。

SR0409 上層は, 初め SR0404 の埋土と考えていたが, その後 SR0409 の上層と認識を改めた。

2. 掘立柱建物

SB0410 調査区内で確認されたのは 3 基のピットのみである。P0406 及び P0407 と対になるピット層が北壁より検出したこと, P0406 から P0407 までの距離と P0408 から東サブトレンチ内で検出された根石と思われる石までの距離がほぼ等しいことから, 東西に二面廂をもつ南北一間以上の掘立柱建物と思われる。ピット内より時代を特定できる遺物は出土しなかったが, ピットが円形または楕円形で直径が 0.2 ~ 0.3m と掘方が狭いこと, 埋土が他の遺構ほど地山に馴染んでいないことから古代以降のものと思われる。検出されたピットの基数や並びからは建物を復元するには至らず正確な規模は不明であるが, 東西に一間 1.8m の廂を有し, 母屋の梁行が 2.72m, 桁行 2.2m 以上の規模をもつ。二面廂であることから, この掘立柱建物は有力者の住居であったとする。

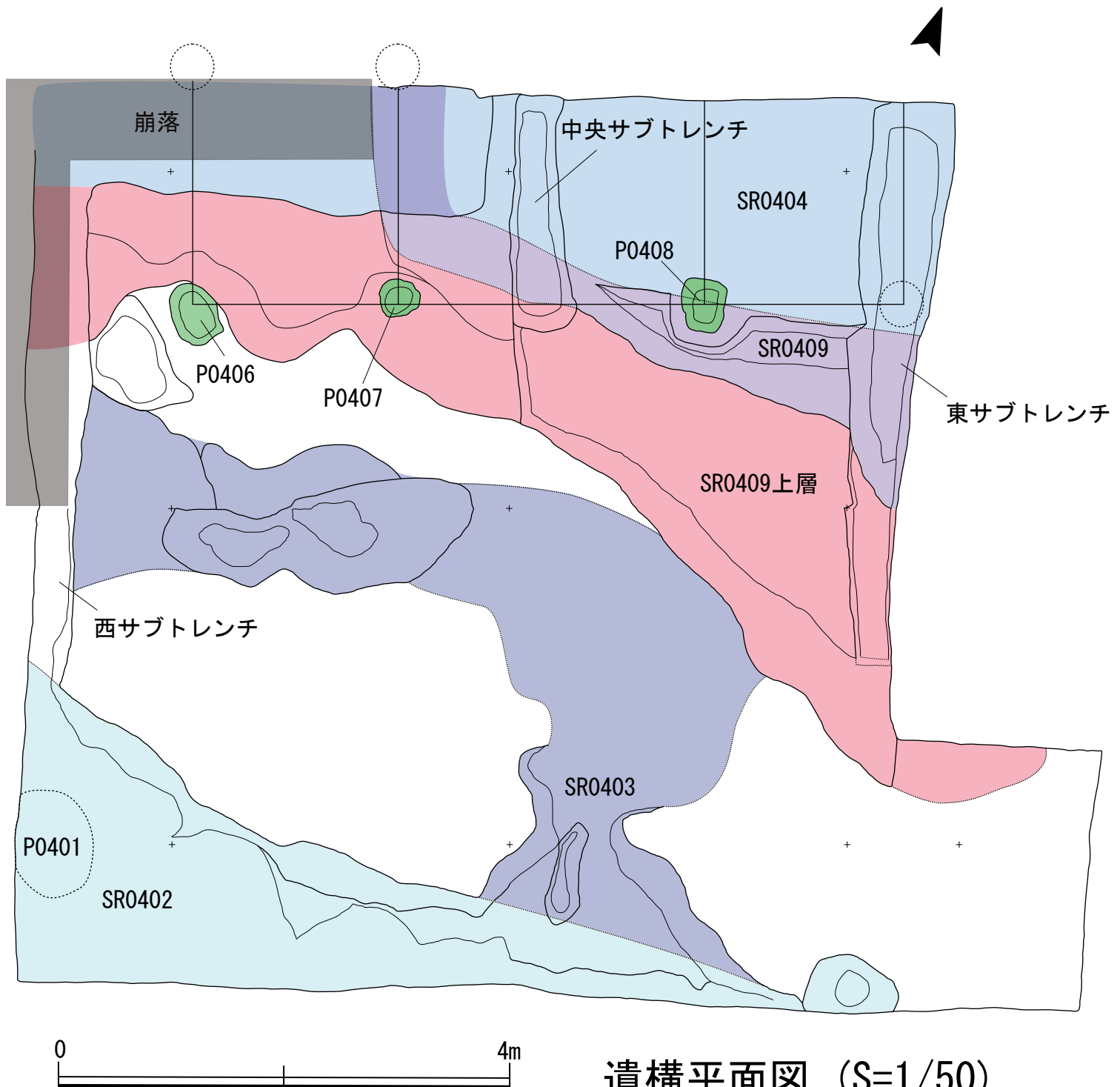
3. ピット, 柱穴

P0401 西壁沿いのSR0402のなかで検出した。P0401はピットとしては調査区の中で最も大きなものであったが、深さは0.08～0.1mと浅く、その周囲から他のピットが確認できなかったため、建物の柱穴であるか不明である。SR0402の掘削に伴い、消失した。P0406, P0407, P0408と埋土が同色であったことから、同時代のものと認識した。

iii. 出土遺物

出土遺物はコンテナケース(55×33×10cm)に6箱出土した。大部分は7世紀を中心とした土師器や須恵器であり、主にSR0402から出土した。多くの土器は、鍋や甕といった煮炊具と杯類の供膳具で構成される。また、SR0402, SR0403からは大型獣の骨が出土した。骨については雨乞いなどの農耕祭祀に使用されたものが流れ着いた可能性がある。

なお、出土遺物については、今後継続して整理作業を行っていく予定である。



遺構平面図 (S=1/50)

iv . おわりに

今回の発掘調査では 2 次調査で確認された SR0202 の続きを発掘することが主体であったが、新たに 3 条の流路を確認したことにより、鈴鹿川の支流がその流れを自然または人工的に変えながら、この地域を流れていたことが判明した。また、掘立柱建物があったことから古代以降にはこの付近を流れていた『河道』と呼べる自然流路は絶えていたと推察される。

河曲低地部の遺跡では大規模な集落跡は確認されておらず、八重垣神社遺跡や宮ノ前遺跡等で古墳時代前期の竪穴住居が比較的に見つかったものの、古墳時代中～後期以降は土坑程度しか確認できていない。ただし、河田宮ノ北遺跡の流路からは、土師器台付甕、高杯、小形鉢、須恵器杯蓋、杯身といった遺物が膨大な量出土しており、その南部には豪族居館の存在も想定されている（伊藤 2004）。また、宮ノ前遺跡第 2 次調査でも SR0201 からは膨大な量の遺物が、SR0202 からは土師器の鍋や甕といった煮炊具と須恵器の杯類といった供膳具が出土した。SR0202 の出土状況からは西側から投棄され、水の流れにより流されたと考えられてる（田部 2015）。SR0202 の続き溝である SR0402 も遺物は右岸側から多く出土し、出土数は西側へ向かうに従い多くなった。これらのことから、SR0402 が北西から南東へ流れていた河道であること、土器類が右岸側から投棄されたことがわかった。これまでの調査によって出土した遺物の量から複数の集落が上流にあったと推察されている。また、河田宮ノ北遺跡、八重垣神社遺跡、宮ノ前遺跡に囲まれた周知の遺跡空白域にも集落があったと考える。

v . 参考文献

- 伊藤 洋 2010 『十宮古里遺跡発掘調査報告』 鈴鹿市考古博物館
伊藤裕偉・豊田祥三 2004 『河曲の遺跡』 三重県埋蔵文化財センター
田部剛士 2015 「Ⅲ. 2. 宮ノ前遺跡 (第 2 次)」『鈴鹿市考古博物館年報』第 16 号 鈴鹿市考古博物館
藤原秀樹 2008a 「Ⅳ. 7. 八重垣神社遺跡 (第 4 次)」『鈴鹿市考古博物館年報』第 10 号 鈴鹿市考古博物館
藤原秀樹 2008b 「Ⅳ. 9. 八重垣神社遺跡 (第 5 次)」『鈴鹿市考古博物館年報』第 10 号 鈴鹿市考古博物館